

小川未明文学館 館報

第四号

小川未明文学館

vol.4

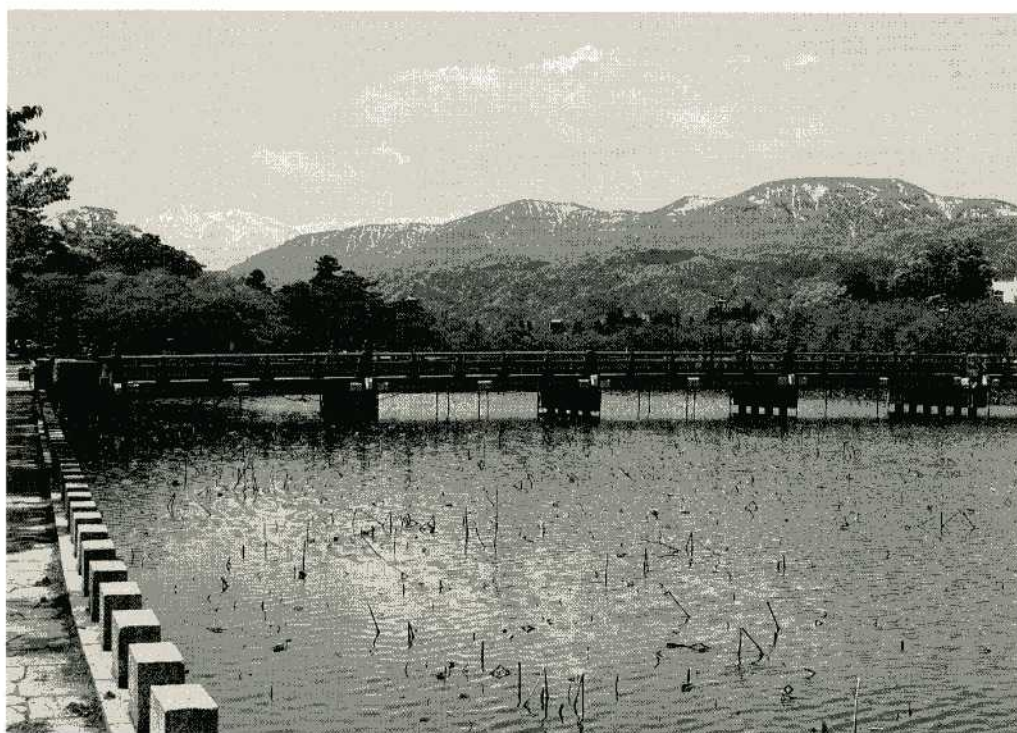
6

小川未明文学館

新潟県上越市本城町八一三〇（高田図書館内）

TEL 025152311083

FAX 025152311086



高田公園西堀より南葉山を望む

未明が6年間通った高田中学は、西堀のすぐ隣にありました。雪深い冬季は春日山から通うことが難しく、堀端の中々殿町にあった漢学教師江坂香堂宅などに下宿して通学しました。若き未明は南葉山を、また晴れた日には妙高山を仰ぎ見て、どのような想いをめぐらせたのでしょうか。

小川未明文学館 館報 第四号

二〇一〇年五月三十一日発行（年刊）

目次

【寄稿】

小笠裕二「童話集『金の輪』とその周辺」 2

【報告】

文学館一年の記録（平成二十一年度） 6

平成二十一年度特別展（報告）

「つながるいのち——『金の輪』・

『ものぐさじじいの来世』絵本原画展」

文学館講座「未明童話『金の輪』の世界」 10

【小川未明文学賞】

13

【ボランティアネットワークだより】

「のぼら vol.6」

【文学館からのお知らせ】

16 14

童話集『金の輪』とその周辺

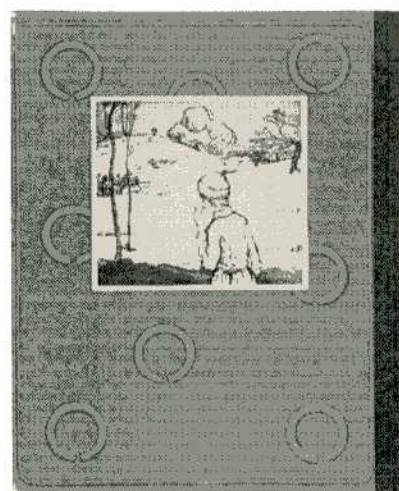
小埜 裕二

(上越教育大学教授)



一、

小川未明の『金の輪』は、大正八年一二月に南北社から刊行された。廣島新太郎の装幀で、本文二二四頁、未明自身による序文の後、童話と詩をとりあわせた、全二五作品の童話集である。信念に貫かれた序文、各作品の内容、童話集の構成、活字の色使い、アンカッ卜版の装丁等を見ると、この童話集が決して安易に計画された出版でないことがわかる。



『金の輪』

1919年12月 南北社

『金の輪』は未明の三冊目の童話集である。最初の童話集『赤い船』(明43・12)刊行後、しばらく未明は童話の創作から離れるが、大正三年頃から再び童話の筆をとり、大正七年に二冊目の童話集『星の世界から』(大7・12)を刊行する。『金の輪』はその一年後に出版された。『金の輪』刊行後、未明は『赤い蠟燭と人魚』(大10・4)、『港に着いた黒んぼ』(大10・11)、『小さな草と太陽』(大正11・9)、『気まぐれの人形師』(大12・3)等の童話集を矢継ぎ早に刊行し、大正期の未明童話の位置を確固たるものにしていく。

『金の輪』刊行時、未明は三七歳であった。大正八年三月、青鳥会を母胎とする雑誌『黒煙』を創刊、四月からは児童雑誌『おとぎの世界』の主宰を務めた。大正七年に創刊された鈴木三重吉による『赤い鳥』の成功を受け、児童雑誌の創刊が相次ぎ、芸術性の高い、いわゆる童心主義童話が大正期の自由な風潮のなかで隆盛をみる。

未明がその流れの先頭の一人に立ったのが『金の輪』であった。未明は、大正三年に長男哲文を亡くし、大正七年に長女晴代を亡くしている。亡児の命をかわりに生きるかのような盛んな仕事ぶりであった。

『金の輪』所収の童話二五編の初出誌は、未明が主宰を務めた「おとぎの世界」が一三作品と半数以上を占める（「おとぎの世界」各号に未明は童話と詩を両方載せることが多かった）。「おとぎの世界」の次に掲載数が多いのが「読売新聞」の六編である¹。その他の掲載誌は「黒煙」が一編、「少年世界」が一編、「こども雑誌」が一編、初出誌不明童話が三編である。



「おとぎの世界」第1年第4号
1919年7月 文光堂



「黒煙」第1巻第3号
1919年5月 黒煙社

二、

童話「馬を殺した鳥」と「百姓と蛇」は、童話集『金の輪』の巻頭と巻末に置かれている。都に出たかもめは歓迎をうけるが、鳥の方は都でもやはり嫌われものであった。不公平な社会に恨みをいだいた鳥は、田舎に戻ると、相手をおだてたり、うそを言って困らせたりするようになる。その挙句、自由を欲していた馬の思いに火をつけ、殺してしまう。一方、「百姓と蛇」の仁作は正直者で信心深い百姓であったが、畑仕事中に蛇を傷つけたことで神経病になってしまう。その仁作の臆病を風刺した物語である。二作品は、たがいに照応している。不公平から生じた怨嗟の念や正直から生じた臆病の念といった内容は、これまでの童話では主題化されることが少なかった。ここから、度を過ぎしてはならないといった新たな教訓を読みとることもできるが、未明は、童話の世界にも人間の裏面に隠された真実を描き出そうとしたのであろう。

だが、『金の輪』はそうした人間の心の悪や弱さを描いた新奇な童話で童話集の前後をはさむかたちで、その内側に、さびしい子供や虐げられた人が異世界の力によって救われる童話を数多く蔵している。淋しく、あるいは苦しくて、何かの救いを待っている人（その多くは子供）のところへ、誰かがやってきて、何かを与えたり、その人の境遇を変えてやる話が多いのが『金の輪』の特徴である。「牛女」「お爺さんの家」「黒い塔」「小供の時分の話」「金の輪」「蠟燭と貝殻」「白い馬」「北海の白鳥」「薬売」には、主題を別にすれば、

この要素が多かれ少なかれ含まれている。

「牛女」では、病気で死んだ牛女が化けてでも子供を見守ろうと思ひ、ひとりになった子供のまえに姿をあらわす。「お爺さんの家」では、正雄の死んだ犬がさびしい正雄のもとへ帰ってくる。「黒い塔」では、身体障害ゆえに家族から疎まれる姫のもとに赤い船がやってきて彼女を連れ去る。「小供の時分の話」では、さびしく往来に立っていた太郎が、あめ売りのじいさんにさらわれる。「金の輪」では、病気で寝ていた太郎のもとに金の輪をまわす少年がやってきて、夕日のなかへ一緒に入っていく。「蠟燭と貝殻」では、海で遭難した父を待ち暮らす母娘のもとに黒い装束をした男が父親の遣いとしてやってくる。「白い馬」では、花売りに歩かされていた次郎のもとに、お婆さんがやってきて彼を白い馬に乗せて連れ去る。「北海の白鳥」では、世の無常を悟った王様のもとに魔法使いがやってきて王様をはまぐりに変身させる。「葉売」では、太郎の前に葉売りがあらわれ、葉売りにもらったもので憧れを与えられる。

一方、こうしたさびしさや何らかの欠如が補われる物語を、旅にでるといふ角度から捉えかえすと、この童話集の多くが移動によって構成されていることが理解される。奉公で田舎を出る話は「牛女」「月夜と少年」に、都を求めて旅に出る話は「馬を殺した鳥」「汽車の中の人々」に、どこか別の世界へ連れ出される話は「黒い塔」「金の輪」「白い馬」「北海の白鳥」「小供の時分の話」に、ある場所へあるものを探しに行く話は「めくら星」「お爺さんの家」に見られる。(右のうち、行って帰ってくる話は「馬を殺した鳥」「牛女」

「汽車の中の人々」「小供の時分の話」に見られるが、多くは、「黒い塔」「金の輪」「白い馬」「北海の白鳥」「めくら星」等、行って帰ってこない話に分類される。)

明治以降、中央集権が進み、地方から都会へと人々は移っていった。生まれた土地に住み続け、代々の職業を自己の生業とした時代から、職業を替え、立身出世を目指すようになっていく。しかし、明治末になるとそうした方向にも種々の限界や困難が生じてきて、大正期になると人々は、むしろ心のよりどころを求めようになっていく。田舎から都会へといった、いわば横への移動に限界が見えてきたことで、垂直の移動が志向された。もはや横への移動によっては救われない行き止まりの状態にある主人公達は、別の世界へ連れ行かれることで救われるのである。

三、

『金の輪』では、救いは別の世界からもたらされる。それは『赤い船』以来、未明がもった救いの方向性であった。現実世界とは異なる世界から救い手がやってきて、主人公を連れ去ることもあれば、そこから裁き手がやってきて人間を滅ぼすこともあった。ロマン主義者らしい異世界と現実世界の連続性のなかに未明童話の世界があった。未明は序文「童話の詩的価値」の中で次のように述べている。

子供程ロマンチストはありません。(中略)／ この子供の心

境を思想上の故郷とし、子供の信仰と裁断と、観念の上に人生の哲学を置いて書かれたものは私達の求める「童話」であります。／ 自由な世界―創造の世界―神秘の世界―これが即ち童話であります。／ 永遠に対する憧れと、はかない、しかし常に若やかな美と、この生活の慰藉とを、私は、自から童話の世界に於て求めるより他に途のないことを思ひます。／ さるにても、不思議なる一事は、空想の世界、連想、幻想の世界であります。

未明はさらに「私達が、何等かの幻想や、連想によつて、既に少年の時代に失はれた世界をもう一度取り返すことが出来たら、どんなに仕合せでありませう。而して、もし其れによつて、更に少年を楽しませることが出来たら、どんなに私達は、芸術の誇りを感じるであります。」と述べ、序文を結ぶ。この童話集が大人に向けて書かれ、また「直感が冴え」た子供に理解されるものとして書かれていたことが分かる。

ところで「金の輪」的な子供が異世界へ連れやられるモチーフは、『金の輪』刊行前年の長女晴代の死と関連づけて論じられることが多かった。しかし子供の死以前に書かれた『赤い船』所収の「森」（明43・8）には「金の輪」と近似したテーマが見られ、見知らぬ友達と一緒に異世界へ旅立つテーマは、未明童話の原点ともいえるモチーフであったことがわかる。

子供にとつて金の輪はそれを回して遊ぶ行為によつて、より子供を子供の本源的な世界へと向かわせ、大人にとつて金の輪は失われ

た童心をおのれの心に巻き戻す象徴的なきかけとなった。童話集『金の輪』は、前年に亡くなった長女晴代や長男哲文ら、子供であるがゆえに行き所なく、さびしく空想の世界に遊ぶしかない、弱くはかない存在へのレクイエムでもあるが、それは未明の子の死によつて運命的に描き出されることになったとはいえ、もともと未明の心のなかにあったものである。

しかし、この救いの方向は、やがて現実世界のなかでの救いへと大きく向きを変えていく。童話集『赤い蠟燭と人魚』や『小さな草と太陽』を見るかぎり、自然や故郷の中に、あるいは社会主義的な世界の中に、救いの拠り所を見いだしていくテーマとなっていく。未明の子供の死は、『金の輪』におけるロマン主義的世界を完成させるものになったと同時に、ロマン主義ではどうしても納得しきれない重い死を受け止め、現実の社会をどのようにかえていけば弱者が救われるのかといった問題へと未明童話の内実を大きく変えさせる大事な契機となった。

1 初出誌・紙が不明であった未明童話のうち、次の五作品は「読売新聞」に掲載されたものである。「蠟燭と貝殻」（大正8年6月7日、9〜10日）、「誰が一番悪いか」（大正8年6月21日、23〜24日）、「月夜と少年」（大正7年10月2〜3日）、「酒倉」（大正7年10月24〜25日）、「白い馬」（大正8年2月24〜26日）

朗読研修会

五月三十日・六月二十日・
七月二十五日

参加者 28名

橘 由貴さん（ヴォイスアーティスト・朗読療法士）を講師に、朗読研修会を開催しました。研修会では、声と発声の基礎から魅力的なことは表現方法まで学び、三回目の演習では、受講者の皆さんの朗読で、おはなし会を開催しました。未明の童話「気まぐれの人形師」を全員で朗読し、文学館に集まったお客さんの前で発表しました。

特別展

つながるいのち

「金の輪」・「ものぐさじじいの来世」

絵本原画展

九月十二日～十月十二日

来館者 4677人

つながるいのちをテーマに、近年出版された未明の童話絵本の中から「金の輪」、「ものぐさじじいの来世」の二冊の絵本原画を紹介しました。その他、作品をイメージした絵画や、おもちゃ（ビープショー）、人形など合わせて55点を展示しました。期間中には、記念講演会・ワークショップ（12日）、手づくり絵本のワークショップ（13日）、ギャラリートーク+ミニコンサート（27日）といったイベントを開催しました。

記念講演会+ワークショップ

九月十二日

参加者 25名

特別展会期初日のイベントとして、「金の輪」の作家 吉田稔美さん（イラストレーター）を講師にお迎えし、記念講演会+ワークショップを開催しました。ワークショップでは、紙芝居のルーツと言われる「立ち絵」を作りました。詳しくは、特別展報告の頁をご覧ください。

ギャラリートーク+ミニコンサート

九月二十七日

参加者 50名

特別展期間中、「ものぐさじじいの来世」の作家 高岡洋介さんをお迎えし、ギャラリートークを行いました。その後、山崎美矢子さん、はるかさんによるミニコンサートを開催し、童謡とパロック時代の名曲を中心にフラウト・トラヴェルソとチェンバロの調べをお楽しみいただきました。お二人の演奏に合わせて、高岡さんによるライブペインティングを行い、美しい調べと即興で描かれた色鮮やかな絵画に、「とても美しい、素晴らしい夢のある絵に感動でした」といった感想が寄せられました。

手づくり絵本のワークショップ

九月十三日

参加者 28名

手づくり絵本 木いちこの会のお手伝いで、未明童話「赤いちようちんの話」を題材に、仕掛け絵本を作るワークショップを開催しました。はじめに、木いちこの会のみなさんの朗読があり、お話の世界に親しんだ後、色紙やモールを使って、たぬきがとび出すオリジナル絵本を作りました。子供から大人まで夢中になつて取り組んだワークショップでした。

童話創作講座

九月二十日・十月十一日・十八日

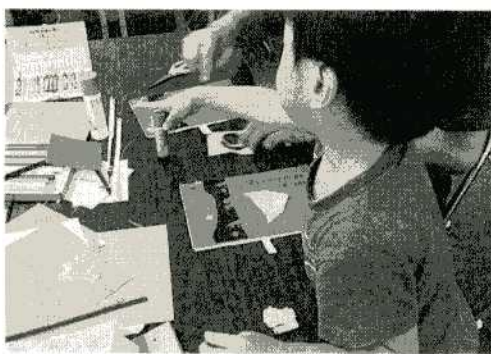
(入門コース)

十月四日・二十五日

(実践コース)

参加者 16名

上越市在住の児童文学作家 杉みき子さんを講師に、入門コースと実践コースに分かれて短篇童話の書き方について学びました。毎年参加されている受講者も多く、それぞれに作風を確立され、創作に動んでいる様子が印象的でした。受講者の皆さんの作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーで読むことができます。



手づくり絵本のワークショップ



特別展 つながるいのち

文学館講座
未明童話「金の輪」の世界

十月三日・十日・十七日
参加者 30名

未明童話「金の輪」の世界を総合テーマに、連続講座を開催しました。講師は、第一回宮川健郎さん、第二回有澤俊太郎さん、第三回小笠裕二さんの三人で、「金の輪」を題材にそれぞれ独自の視点からご講義をいただきました。「様々な角度から「金の輪」を見つめることができ、有意義な時間でした。」「作品の内容だけでなく、その影にある作者の心境や、時代背景について少し知ることができた。」、といった感想も聞かれました。詳しくは、文学館講座報告の頁で紹介しています。

童話が開く心の扉

朗読と映画による小川未明の世界

十一月十一日・十二日・十三日

毎年、市内の小学6年生を対象に開催している朗読コンサートは、九回目を迎え、橘由貴さんの朗読と翠川敬基さんのチェロで未明童話「赤い蠟燭と人魚」、「月夜と眼鏡」の幻想的世界へと誘われました。後半は、未明のメッセージ（肉声）とアニメーション「のぼら」を紹介しました。今年は45校1675人の生徒が参加しました。

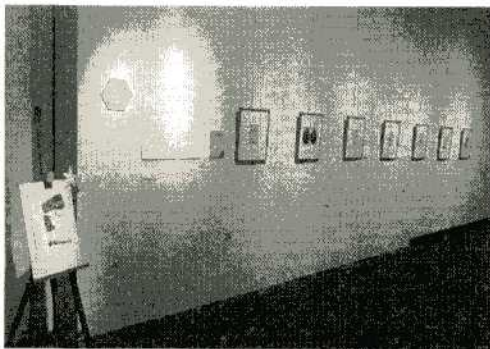
企画展

「よっぱらい星」小川哲郎挿絵原画展

十一月二十八日～十二月十三日
来館者 1247人

未明の次男小川哲郎（画家）が手がけた未明の童話集「よっぱらい星」（昭和23年、人文書房）の挿絵原画を展示し、繊細で美しいペン画と親子協働の仕事を紹介しました。

「情感あふれる挿絵を見て、物語の世界に惹きこまれました。」「未明の息子さん画家であり、父親の童話集の挿絵を描いていることを初めて知りました。」といった感想が聞かれました。



小川哲郎挿絵原画展

第18回 小川未明文学賞贈呈式

十一月二十八日

「小川未明の文学精神を次の世代に継承し、子どもたちの心に夢と希望を育む」ことを目的に、平成4年から募集している第18回小川未明文学賞の贈呈式を、上越市内で開催。大賞は市川洋介さんの「アンモナイトの森で」、優秀賞は森川成美さんの「アオダイショウの日々」と、白川みことさんの「ぼくらの宝島」でした。文学賞の頁で、大賞の市川洋介さんの「受賞の言葉」を紹介しています。

小川未明と絵てがみ展

二月二十七日～三月七日

市内の小学校6年生を対象に開催している「童話が開く心の扉」朗読コンサートを鑑賞した児童から、未明作品の感想や未明本人に宛てた絵手紙を描いてもらいました。大賞作品は、木南佳奈さん（直江津南小学校）の「涙のろうそく」でした。



大賞作品



文学館講座 第3回



ミニコンサート+ライブペインティング

つながるいのち

『金の輪』・『ものぐさじじいの来世』

絵本原画展

〈開期〉 九月十二日（土）～十月十二日（月・祝）

〈期間中來館者〉 四六七七人

近年発行された未明の童話絵本六冊の中から、「つながるいのち」をテーマに、「金の輪」・『ものぐさじじいの来世』の絵本原画を紹介しました。原画のほか、作品をイメージした絵や、カラクリおもちゃなど55点を展示し、期間中のイベントとして、記念講演会、ギャラリートーク+ミニコンサートを開催しました。ここでは、講演会とギャラリートークの内容の一部を紹介します。

特別展記念講演会（記録）

演題

「金の輪」の絵本ができるまで

九月十二日（土）

講師…吉田 稔美氏

（絵本『金の輪』作家）

この「金の輪」のお話は最後に太郎という子供が亡くなるところで唐突に終わります。この亡くなるということを考えると、悲しい物語だというふうに言われる方がいます。私の姉も小川未明の作品が好きですが、ちょうどこの絵本の仕事に取り組んでいたところに子供が難病で、「すごくこの話は辛い」と言いました。

この絵本を作る過程で、本の見返しに、お話とは直接関係のない、こういう絵（太郎と母親の絵）を入れましたのも、姉の母親としての気持ちをも、「太郎」がちゃんと母親に愛されていた子供だったというところを入れたらと思ったからです。辛い姉の子は回復しましたが、小川未明さんは、自分の子供を二人小さいうちに亡くされています。そのことがあって、「金の輪」を書かれたと言われています。子供を亡くして未明自身も辛かったはずですが、でも、この話を残された親のためには書いていないんじゃないかと思えます。このお話をある友人が、アンデルセンの「マッチ売りの少女」に似ているねっ

て言いました。私もそれは子供の時に読んでいましたけれど、子供である自分にとっては、結末の死が悲しいということよりも、それに至る物語の美しさの方が心をとらえたと思います。そういうことで、「金の輪」というお話も大人に向けてではなくて、その年齢の、非常に死に近いところにいる子供、病気で一緒に遊ぶ友達がいらない子供、そういう子供にすごく共鳴する、同調するようないか。詩のようなどころがあるのではないかと。やはり私の知人で、子供の時に体が弱く、同じように遊べる友達がいなくて、自分とは外で走り回ったりもできないので、自分と同じようなテンションの、波長の合う友達をほしかった、あるいはそういう友達を見ていたと言出す人が現れました。それは皆、大人になって元気になるから忘れてしまうんですけれど、そういう幻のお友達というのか、そういうことを考えますと、このお話が喚起する不思議さというのが、実はそういうリアリティにあるような気がしてきました。

この絵本を作るまでに五年かかってしまいましたけれども、最後に子供が亡くなる場所で終わることを、どのように解釈するのかということに時間がかかりました。私の中では、金の輪の少年が何者なのか、という謎がずっとありまして、明らかにこの太郎を迎えに来る人なんですけれども、天使や悪魔やそういう存在なのか、あるいは太郎自身、本来自分が出会うべき自分自身だったのでないかと思つて、そう解釈しまして、絵本の表紙を広げると、太郎が白い輪の上で金の輪を転がして、その白い輪をさらに「少年」が転がしているという表現になっています。また、この輪というのが一体何なのかということで、太陽の日輪、輪廻の輪とかいろいろんな考えが頭にあったんですけれども、この世界の命の輪、もっと大きな命の輪につながっていくような、そういうものとして考えて絵にしようかと思うようになりました。うしろの見返しでは、亡くなってからの太郎がよりそういう生命感のある世界に来ているということを描いていますけれど、そういうお話として未明は書いたんじゃないかっていう気がしてきまして、それを絵本せんたいの形にしていこうとしたわけです。



ある友達が、グリム童話に少し似たお話があるよって教えてくれました。それは「ばら」っていう短篇なんですけれども、やはり貧しい子供がいて、森に薪を取りにいられる。そこで知らない男の子に出会って、その知らない少年がバラをくれるんです。そして、そのバラが咲くところにまた会いに来るよって言って、そのバラは蕾なんですけれども、お母さんに渡しますと、お母さんは信じない。そしてそれをコップに挿していると、ある日その男の子が起きてこなくて、そのままベッドの中で亡くなってしまったっていうお話です。「金の輪」は、いきなり「太郎は……」っていうふうが始まりますけれども、なぜ太郎なのかっていうことを思われた方もいらっしゃるんじゃないかと思えます。私が思うには、グリム童話にも、しばしば「ハンスは……」っていう形で始まるお話がありまして、太郎とか花子とか、ごく一般的なよくある名前として書いている。そういう意味では、これを「ハンスは……」っていうことで置き換えますと、このまま翻訳して世界に通じる童話としても読めると思います。このお話は、昔に書かれたものであるとしても、今とこれからの子供にも読まれることができる話と思っていて、この絵本の中では、時代も国もよく分からないような感じの風俗にしています。こういう絵だけのページ (p.23,24) も

ありますけれど、これは、輪をくぐっていくと、自然のたくさんの命につながっているということ表現しようとしたものです。

ここに絵本の試作品を持ってまいりました。絵本が完成するまで、私の場合は、下描きを作って、文章を入れてみて、こういう紙をはり合わせて、本のような形にしてめくって見ます。こうした試作を繰り返しながら、最終的にもとめる絵本に近いものになるまで繰り返しやって作っています。

ギャラリートーク

九月二十七日(土)

講師…高岡 洋介氏

「ものぐさじじいの来世」作家

——「ものぐさじじいの来世」は、ものぐさなおじいさんの生まれ変わりをユーモラスに描いた作品ですが、最初に、「ものぐさじじいの来世」という作品を読んだときの感想を教えてください。

(高岡) 最初に、出版社の方から話を聞いたときに、すごく面白いなあと思ったのが最初の感想だったんですけど、後々、読んでみると、輪廻を扱ったすごく深い内容で、とても感動しました。

——ここでは、絵本の原画19点を展示し

ていますが、絵本の制作には、どれくらいかかりましたか。

(高岡) ラフ段階を制作するのに、半年以上かかりました。書いても駄目だ、駄目だという感じで、その後、絵を描くのに三ヶ月くらいかかり、やっと完成したという感じです。

——おじいさんの部屋に、カエルやカタツムリ、きのこなどを描いているのは、何か、こういう雰囲気伝えたいとか、お考えがあったのでしょうか。

(高岡) ものぐさじじいさんは全く動かないという設定だったので、自分も静かに動かずにいたんです。そしたら、部屋の中にハエとか、いろいろな虫が入ってきたりして、そのときの様子を絵に描いてみました。

——ものぐさじじいさんがふとんの中に入って、背中を丸くしている様子は、猫や亀の姿にも見えるのですが、高岡さんの「ものぐさじじいさん」像は、どんな風に生まれてきたのでしょうか。

(高岡) 動物を意識して描いたわけではないんですけど、背中を丸めて絵を描いているうちに、もしかしたら、小川未明さんも文章を書いているとき、前のめりになって一生懸命書いたんじゃないかなと思って、背中を丸くしているおじいさん像が生まれてきました。

——おじいさんが転生する南の海ですが、どこかモデルにした場所はありますか。

(高岡) 日本の最南端の波照間島というところに行ったことがあります。すごく海がきれいだったんです。透けて向こうの方まで見えるくらいきれいで、すごく感動したのと同時に、きれいな海を見ながら、その島の方から、スピリチュアルな話をしてもらい、帰るときに、「ものぐさじじいの来世」とその話が重なりまして、波照間島の海の様子をイメージして描かせていただきました。

——高岡さんは、この絵本を描き終わって、「自分の中の時間が少しゆっくりになった気がした」と仰っていますが、自身がこの絵本で伝えたかったことは、何ですか。

(高岡) 伝えたかったということより、教えられたことは、自分の仕事のことや友達のこととか、今、目の前にあることばかり考えずに、たまに、死んだ後のこととか、生まれ変わって海草になるかもしれないとか考えてみるだけで、肩のこりが楽になるというか。ストレスをためないためにも、近視眼的に見ずに、遠くの方まで見渡すと人生楽しくなるのかなということを小川未明さんが教えてくれました。

「未明童話「金の輪」の世界」

平成二十一年度の文学館講座は、「未明童話「金の輪」の世界」をテーマに、宮川健郎氏、有澤俊太郎氏、小笠裕二氏の三人を講師に開催しました。ここでは、講座内容の一部をご紹介します。

第二回「未明童話における死の問題」

十月三日（土） 宮川健郎氏

（武蔵野大学教授）



小川未明が童話に「死」を持ち込んでいるという問題を日本の子供の文学全体の中でどんなふうに考えることができるか、やや広い視点で考えてみることをしたいと思います。

偕成社という出版社から「きょうはこの本読みたいな」というシリーズが出ています。私も含め三人が編集に携わりまして、小学四、五年生から中学生くらいの子供たちが読めるような名作を集めたシリーズです。16冊出ているんですが、10冊目に「かぜをひいた日に読む本」という本があり、この中に、未明の「金の輪」を入れてあります。「かぜをひいた日に読む本」に「金の輪」を入れるのは、どうなんだろう、とちよつとためらったんですが……。結果的には、「病気で寝ているというのは神秘と近づいてしまうような、そういうことでもある。それは日常、子供たちが元気に動いているのは全く違う時間を作ってしまう。そういった時に訪れる神秘を、未明の「金の輪」は書いている。」そのように考えると、子供の生活の中での位置づけもできるのかなというところで収録しました。

このシリーズを出した1990年頃まだ未明に対する激しい批判の名残りが子供の本の世界にありました。戦後間もない昭和20年代後半から30年代前半にかけて1950年代ですが、小川未明は大変批判をされました。長い戦争が終わって、世の中の様々な場所でいろんな見直しが起こる、これが戦後という時代でしたけれど、それは子供の本の世界も全く例外ではありませんでした。新しい戦後という時代を迎えなければ、その中で何をどうんなふうに子供たちに書いていけばいいのかというので、非常に激しい議論が起

こつたんですね。この時期、小川未明は大変批判的に語られたんです。そのことは「金の輪」が最後に子供の死を描いていることも直接的に関係してくることです。鳥越信さんは、「新選日本児童文学 大正編」（小峰書店、1959年）の解説で、未明童話のテーマが「すべてネガティブなもの——人が死ぬ、草木が枯れる、町がほろびる等々——」であり、その内包するエネルギーが「アクティヴな方向へ転化していかない点で児童文学として失格である」という批判をしました。こういった考え方のもとは多分「金の輪」や「赤い蠟燭と人魚」などの結末なんですね。やはり鳥越信さんと一緒に戦後の児童文学革新を進めていった古田足日さんが「さよなら未明——日本近代童話の本質——」（『現代児童文学論』、くろしお出版、1959年）という文章を書いています。テーマ・内容というよりは表現の問題に重きを置いて、やはり批判的に論じた文章です。簡単に言うと、小川未明の童話というのが、詩的で象徴的な言葉で、心象風景を書くようなものであることを批判しました。詩的で象徴的な言葉で心の景色を書く、これは文学あるいは詩というのはそういうものじゃないかというふうに思うんですけども、未明を批判的に扱う議論をした児童文学者たちは、少年少女期が長い戦争と重なっている人たち、なかつ敗戦の経験を経て、子供時代をもう一回捉え直すというのをしていないとならなくなった人達だと思います。戦争を後から来る子供たちに語り伝えることをしなければならぬ、あるいは戦争というものを引き起してしまう社会という問題を書こうとしたとき、もっと散文的な言葉というか、説明的な言葉を獲得する必要があるというふうにご自分で考えていったんじゃないかと思えます。社会や戦争を説明する言葉は未明のような言葉ではどうもないのではないかと、詩的で象徴的でかなり文芸性の高い、未明のような言葉で子供たちに戦争や社会を説明する事は実は難しいのではないかと、これが未明童話に対する批判の底にあることではないかというふうに私は思っています。実際に日本の子供の文学は1950年代の末頃から、急展開をしています。心の中の景色ではなくて子供を巡る状況、それは社会ということでもありませんけど、子供を巡る状況を散文的な言葉で描くようなものに変わっていくんです。その変わったものが、僕らが現代児童文学と呼んでいるものです。

「金の輪」に戻りますけど、未明という作家の実生活ということ併せて考えると、作家になりたての頃はたいへん貧しい生活も経験しておりますし、最初のお子さん二人、長男と長女が病気で幼くして亡くなってしまいます。その後「金の輪」のような作品が出てくるわけですが、我が子を亡くすという体験もどこかで、作家未明の中では響いていたのかなと、思います。

未明を師として仰いだ坪田譲治の「コ

「マ」(『文芸日本』1935.6) という作品は、未明の長男が亡くなった時のことを書いてあるようです。「正太」という子供を亡くした「小野」という人が、正太が亡くなった後、正太の机の中から麻ひもの巻かれたコマを見つけてます。明日コマをまわして遊ぼうと思って巻いたのかもしれないけれど、もうコマをまわす本人は亡くなっていると、そういう小説です。坪田譲治もやはり、子供の死という問題を作品の中で書いていまして、これについて「残酷な気持ちで子供を死なすのではないんですよ。かえって子供を愛惜するんですよ。」(『坪田譲治童話研究』、岩崎書店、1971年)と語っています。子供の死をネガティブなテーマとした鳥越信さんとは違う視点がここにはあります。

未明は「死」を書きましたけれど、それは現世的な生や死ではなくて、もっと大きな巡りの中で子供の命というのを捉えるような、そういう考え方があったのではないかと思えます。「金の輪」は、単に子供が死んでしまったというよりはもっと大きな巡り、もっと大きな世界に子供が入っていったのではないかという、現世的な生死とはまた違った捉え方がありそうです。近代は医学の進歩もあって、命を持った身体というのがどこかで物として扱われるような、そういうような考え方に陥っているのではないかと思うんですけど、そうではない死の捉え方みたいなものが未明の中にはあっ

たのではないかと、そういう別の視点を探りたい気がしています。

先ほど申し上げたように、現代の児童文学が未明を批判して出発したのが、1960年前後ですが、60年代から70年代は、鳥越さんが言うようなアクティブなテーマを好んで書くような時代でした。ところが、80年代に入って、那須正幹の『ぼくらは海へ』(偕成社、1980年)といった作品が発表されて以来、作品に描かれる問題が必ず乗り越えられられるかどうかはわからないという前提が変わっていきます。「ぼくらは海へ」は、タブーだった死を書いています。死の問題がやはり人間にとって根源的な、重要な問題だということでもあるでしょうし、わりと小さい頃から、例えばごく低年齢で受験に失敗してしまうとか、そういうような今までなかったようなことが子供時代からあったり、ある種の喪失感みたいなものが子供の生活の中にあるようになってきているとも思えます。こうやって見えますと、鳥越さんの批判というのは現代児童文学の出発期の60年代70年代には非常に意味を持っていたと思いますけど、それ以前、あるいは80年代以降の子供の文学の中ではもう少し違った見え方をすると、それに伴って小川未明ももう少し違った見え方をします。「ぼくらは海へ」や、子供の身近なところで死を描いた短編集『少年時代の画集』(森忠明、講談社、1985年)、大人の読み物にもなった児童書『つめたいよるに』(江國香織、

理論社、1989年)などは、どこかで未明の世界をもう一回現代風によりみえさせた、そういう未明的なものの復権のようにも思います。未明という人をついの試金石にして、日本の児童文学の所々を眺めていくと色々なことがわかるのではないかと、そういうことを今日は、特に死ということを中心に考えてみました。

第10回「ラフカディオ・ハーンと『関わりか』」

十月十日(土) 有澤俊太郎氏
(上越教育大学教授)



事であるから、というようなことを言われて、小川未明のことを調べたり、未明に影響を与えたラフカディオ・ハーンのことを調べたりしました。当時、滑川先生と非常に仲が良かった波多野完治という方がおられました、話を聞きに行つて来いということで、お訪ねした時、日本の児童文学について最近どうということが印象に残つていらつしやいますかと聞いたら、小川未明の否定ですね、そういう話をしていたら、非常に暗くて、向目的ではないけれど、童話というものの伝統を真正面から受け止めて書いた人なんだと。ここからいろいろと読んでいくとひとつの方向性が出てくるんじゃないかと肯定的に言われた記憶が今でもあります。このようなことが小川未明とかハーンとかについて知るようになったきっかけです。

「未明とハーン」ということで、童話集『金の輪』(南北社、1919.12)の序文に、未明は「童話の詩的価値」として次のように書いています。

「ラフカディオ・ハーンが『日まわり』の花を見てウェールズにあつた、少年時代のある日のことを記憶から呼び起して、其れをなつかしく思ったことが、其の作に書いてありました。私達が、何等かの幻想や、連想によつて、既に少年の時代に失はれた世界をもう一度取り返すことが出来たら、どんなに仕合わせでありますか。」

という記述があります。『愁人』(隆文館、1907.6)にも、同じようにハーンの

「日まわり」について書いてあります。この他にも、ハーンの「日まわり」について、同じようなことを繰り返し繰り返して書いています。そうなること、かなり「日まわり」に対する愛着があった、影響を受けたところがあったのではないかなと思います。もちろん創作ですから、未明なりに、なにかインスピレーションを受けて、それを創作の糧にしたんですね。

岡上鈴江さん（未明次女）も言っておられますけど、未明は早稲田大学でハーンから講義を受けているわけですよ。実際にハーンの講義を受けたことも非常に大きいと思うんですね。その講義というのがすべて英語だったというんで、よくわからないところもあったと。ハーンの著作を読むけれど、半分くらいしかわからない講義には興味を引き起こされなかった（小川未明「上京当時の回想」『文章世界』2014.5）。これは、とても正直で実感がある回想だと思います。全部わかる必要はないんじゃないでしょうか。ハーンの講義を聞いて、これから自分の資質に合うようなことを、デフォルメして大きくしたり、あるいは小さくして自分の中に取り込んでいく、ということができれば創造的な理解というか、そこに誤解が少し入っていてもいいんじゃないでしょうか。

それで私は興味があったものですから、未明の「金の輪」とハーンの「日まわり」を比べてみようかなと思っただけです。ハーンからの影響というのは、そう簡単に

ここがこうだなどとは言えないものです。言えれば逆におかしいです。でも何か得たものがあるんじゃないかなということ、比べて読んでみるということをやってみたわけですね。

では、「日まわり」を読んでいきます。最初、「ロバート」と「ぼく」が「妖精の輪」(Fairy Rings)を探していたが見つからなかった。次に、丘を駆け降りて、竖琴弾きを聞きに行く。はじめ、竖琴弾きに抱いた反感がやがて共感に変わっていく。そうすると、「君はあいつに泣かされたんだね」とロバートが同情するよるに言い、「あいつはジブシーにちがいない。あいつは化け物(ゴブリン)だ、さもなきや妖精かな。」ということ、「ここにやってきたらどうしよう？」とたずねたぼくに、ロバートが「日のあるうちは人をさらわないうさ」と答える。これが四十年前、二人に起こったその出来事の思い出として書かれています。

この「妖精の輪」というのを調べてみると、「妖精たちの舞踏の跡」、「草の上に現れる輪、キノコの輪」である。この妖精の輪の中に入ると、人間の世界では何十年も経ってしまうそうです。不思議ですよ。ウェールズという土地には、こういう伝説というか、伝承がたくさんあるんですね。

次に、
「つい、きのうのこと、わたしは高田村の近くで、日本人もほとんど同じように、「日まわり」と呼んでいる花に目をとめた。す

ると四十年のへだたりをどびこえて、あのさすらいの竖琴弾きの声もどってきて、わたしをぞくぞくさせた。」

とあります（繁尾久訳）。日まわりが HINAWARI と、ここで出てくる。「夕べに沈む日を見おくりしごと、あしたに昇る日を迎うひまわり」という竖琴弾きの歌ですね。まずこれを思い出した。それからその次に

「ふたたび、わたしは、あのウェールズの丘に落ちたまだらな日影を見た。すると一瞬ロバートが、またぼくのそばにふっと立っている。あの少女のような顔に、黄金の巻き毛をたらしめて。ぼくらは妖精の輪をさがしている。……だが、そのロバートの実在のすべては、はるか昔、海難にあり、いまや豊かで、わたしの手のとどかぬ何かに変わってしまった。……友のためおのが命を捨つ。愛のこれより大なるはなし。……」

……」
ここ、最後は聖書ですね。ヨハネの第15章。

こうして登場人物や構成を見ると「金の輪」と似ているようで似ていない。似てないという人の方が多いんじゃないかなと思います。確かにロバートとはくという少年が二人出てきて、後にその友が海難にあり、死ぬ、というようなこととはありますけど。

ではなぜ、未明は、繰り返しハーンの「日まわり」について書いたのかなと思っただけです。「回る・回す (turn)」という、ひとつのイメージというのか、そう

いうものに深い関係があるのではないかなという気がします。このあたりにあれだけしつこくハーンの「日まわり」について言っている手がかりみたいなものが隠されているんじゃないかと思ったりするんですよ。ハーンは、「日まわり」を "Hinawari, The Sunward-turning" と日本語に沿って訳して "ward" というのは、その方へという意味ですね。日の方へ回る、そういう花なんだと。回っているんだ、という言葉を使っています。回ると回すとはまた違います。日まわりは回っているんですよ。「金の輪」では回しているでしょう、太郎に会う少年が。

創作の根本的な所にあるイメージを捉える力。小川未明という人のすごさは、そういうところにあるのかなと思います。そして「回る」というイメージを「金の輪」では、「回す」話にしたということ、ろがすごいなあ。と。「金の輪」の輪は人によつてはいつまでも回っているようなイメージを受けるかもしれません。回っているということ、は、「動いている」、「生きていく」、「つながっている」ということですよ。

未明の理解力は相当なものです。小川未明はハーンの作品の核心のところをつかんで、見事に創作した。ハーンから抽象的なイメージをもらって、創作に転化した、基本的なイメージを捉え、作品に転化する能力が備わっていたといえると思います。

小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、平成4年に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。

今年で18回目を迎え、これまでに延べ8400編を越える作品が国内外から寄せられました。

大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。



小川未明文学賞贈呈式

第19回募集要項

◆募集作品

- ・小学3～6年生を読者対象とした創作児童文学で、内容・形式は自由。
- ・400字詰め原稿用紙で50枚～120枚
- ・未発表作品に限ります。

◆応募資格

年齢、プロ・アマを問いません。

◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参してください。

◆締切

平成22年7月31日（土）

（当日消印有効）

◆入選作

- ・大賞1作（ブロンズ像・賞金100万円・副賞）
- ・優秀賞2作（賞金20万円・副賞）

◆発表

大賞・優秀賞の受賞者は、11月上旬に本人に直接通知します。

◆贈呈式

平成22年11月（予定）

（会場・東京都内）

応募・お問合せ先

〒943-0832 新潟県上越市本町5-5-9

ランドビル2F

街なかサテライト内

上越市文化振興課

「小川未明文学賞係」

TEL 025-5266-6903

FAX 025-5266-6904

E-mail: mimei@city.joetsu.lg.jp

受賞のひとこと

私は、長年勤めた地元の市役所を退職し、ようやく得た自由な時間で、ゆつくりと昔に読んだ本を読み直したり、好きな写真を撮ったりする生活を送りはじめたところでした。そんな中で書いた一篇の物語により、思いがけず小川未明文学賞の大賞をいただきました。

書こうとする物語について、ほんやりと思いをめぐらせているとき、ふと、頭に浮かんできたのは、北方のほの暗い叙情にみちた、小川未明の悲しくも美しい作品の数々でした。児童文学を書くのは、まったく初めての経験でしたが、あまり迷うこともなく、小川未明に導かれるようにして、私は、ひとつの北国の物語を書き進めていきました。

私が生まれ育ったのは、北海道でも早くに開発された炭鉱のまちで、そこはアンモナイトなどの化石を数多く産出する地域でもありました。受賞作の「アンモナイトの森で」は、このふるさとの炭鉱町とアンモナイトを思い浮かべながら書いた物語でした。

物語を書くとき、人は想像力の翼を広げ、また、それを補うため読んだり、調べたりもします。しかし、何よりも自分の中に、自分の生きてきた世界の中にこそ、多くの物語がひそんでいるのではないのでしょうか。写真でも観光名所などより、自分がよく知る周辺の四季の風景や花々の方に私は魅かれます。

この賞をめざす方々も、いま一度、原点の小川未明の作品世界とともに、自身や周囲を見つめてみては。そこに、あなたにとって大切な物語が眠っているかもしれません。

小川未明文学賞は、地方自治体の主催にもかかわらず、地域を越えて広く全国に門戸を開いている数少ない賞です。これからも、その高い志に込める多くの作品が寄せられることでしょう。新潟県上越市のみなさんや小川未明文学賞委員会など、この賞に関わるすべての方々に心から敬意と感謝を申し上げます。



第18回 小川未明文学賞大賞受賞 市川洋介

（大賞作品「アンモナイトの森で」）

のばら

vol.6

発行：未明ボランティアネットワーク

発行日：2010年5月31日

未明ボランティアネットワークだより

平成21年度の活動

- ・小川未明文学館ビッグブックシアターおはなし会
(毎月第2・4日曜日、午後2時～) 延べ参加者347名
- ・小・中学校へのお出張おはなし会
- ・特別展への協力(記念講演・立絵づくりワークショップ
手作り絵本のワークショップ・おはなし会・展示監視)
- ・会員の研修(森のおうちグループとの朗読交流会)

スタンプ10個をまいりました



町田さん

特別展おはなし会 『こんにちは未明さん』

特別展期間中の9月19日(土) 市民ギャラリーにて、オープニング「雲のごとく」(瀬下健二作曲)をキーボード、フルート演奏に合わせて全員で合唱。「赤いちょうちんの話」映像と影絵による朗読、「飴チョコの天使」、紙芝居「ある夜の星たちの話」OHPでの朗読など各グループの工夫や演出で小川未明童話の世界を楽しんでいただきました。



赤いちょうちんの話



飴チョコの天使



ある夜の星たちの話

学校へのお出張おはなし会

新型インフルエンザ流行!! 全校マスクをした状態で読書旬間が始まりました。
未広小・黒川小・保倉小・下黒川小・高田西小・桑取小・中保倉小・吉木小の8校へ行きました。

担当の先生より

映像や音楽がとてもステキでゆったりした優しい語り口調で未明の世界に引き込まれました。
これをきっかけに未明のお話に興味をもってくれたら良いと思います。

● お知らせ ●

小川未明関係資料の収集について
ご協力をお願い

小川未明文学館では、未明に関係する文学資料の収集に努めています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いいたします。資料の寄贈については、特定の場合（すでに複数点を所蔵している資料等）を除きお受けしますので、ご不明の点はお問合せいただくと幸いです。

【主な収集資料】

1. 特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料（短冊・書軸等）、写真（オリジナル）、小川未明関係者資料（未明書簡、献本など）

2. 図書

未明作品集（未明生前・没後刊行図書）、全集・選集（未明作品を一部所収した資料も含む）、初出雑誌（未明作品掲載）、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3. 参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事（雑誌・新聞等）

平成22年度 小川未明文学館カレンダー

- 5月 朗読研修会 講師：橋由貴さん
5月29日・6月26日・7月17日 いずれも土曜日
- 7月 小川未明文学賞締切 31日（土）
- 9月 特別展「雪国が生んだ童話作家
小川未明と杉みき子」（仮）
9月25日（土）～10月31日（日）
- 10月 文学館講座 テーマ「小川未明と杉みき子」（予定）
- 11月 童話創作講座 講師：杉みき子さん
小川未明文学賞贈呈式（東京）
- 12月 童話が開く心の扉
- 2月 小川未明と絵てがみ展
2月26日（土）～3月13日（日）

*特別展の他に、随時小企画展を開催。

*毎月第2・4日曜日午後2時から未明ボランティアネットワークによるおはなし会を開催。

小川未明文学館のご利用案内

開館時間

火・金曜日 午前10時から午後7時
（6月から9月の間は午後8時まで）
土・日・休日 午前10時から午後6時

休館日

毎週月曜日（この日が休日の場合はその翌日）
休日の翌日・館内整理日・資料整理期間
年末年始（12/29～1/3）

入館料 無料



お問合せ

〒943-0835
新潟県上越市本城町8-30（高田図書館内）
TEL 025-523-1083
FAX 025-523-1086
URL <http://www.city.joetsu.niigata.jp/sisetu/ogawa-mimei/index.html>